

写生による人間形成

——対象と語りながら描く写生の一考察——

奥 原 球 喜

The Character Development through Sketching

——A Study of Sketching Based on Dialogue with the Object——

Tamaki OKUHARA

Key words : 人格形成 Character Development, 写生 Sketching, 見ること watching, 対話 dialogue

1. 緒 言

美術教育は人格形成に寄与すると言われる。しかし、子どもたちは図工・美術の時間を重ねることで、本当に人間的成長を果たしているのだろうか。

児童生徒・学生が、造形表現したり鑑賞したりすることによって、「これまで知らなかったことがわかった」「自分を見つめた」「美しさに心が震えた」「あたたかくやさしい気持ちになった」「相手の思いを推し量ることができた」等の感想を持つような、彼らの内面に迫る題材と取組方法はどのようなものであればいいのだろうか。

そのような問題意識に応える一つとして、景色や物と向き合い、その有様を見たまに描く「写生」が考えられる。その際、対象と心を通わせながら描くことが重要となる。

中でも自然を対象とする写生は、自然の営みに学ぶという行為である。その自然の前では、本来誰もが持っているやさしさが引き出され、妥協を許さない強さを持つよう鍛えられることとなる。そんな自然に对峙するには、生半可な態度では受け入れられない。自然に受け入れられるには、集中して対象をよく見、懸命に表現するという造形態度が求められる。その態度はますます自らの美的感覚を磨き、創造力を発揮しようとする姿勢につながる。対象や自分に真摯に向き合

うことによって緊張感のある表現が生まれる。

このようにして、写生する者はその観察と表現の行為を通じて、自己と自然との同一化の方向に歩み出し、より自然に、そして真理に近づき、人間として成長すると考えられる。

それでは、写生を通じてより自然に近づくにはどのような途があるのだろうか。

その一つの方法として、「対象と語りながら描く」ことが考えられる。それは、対象をよく見てコミュニケーションを取り、描きながら感情移入して更によく見て知り、そのものになって改めて自らを見つめ、人格を向上させるという精神的営みを進めることとなるからである。

本稿では、1987年度から2年間、広島市立亀山小学校5・6年生で「ゆとりの時間」を活用して重ねた写生の取組と、2009年度、関西国際大学で行った、教育学部保育専門コース1年生、3クラス89名の写生「花と語る」の授業の二つの実践を通して、語りながら行う写生が対象と心を通わせ、内面的発達を促すというその有効性について論述するものである。

2. 写生と人格形成

描くことは見ることである。描こうと思う対象と出会い、あるまをを表そうとする。見なければ描き進めることができないからよく見ようとする。見ることに

よって驚きや感動と共に、新しい発見をする。

その対象をよく見て行う写生が、自己を見つめ、鍛えるという精神性を高める営みであることは多くの先哲の実践にも見ることができる。

たとえば富士山を初めとして1500点もの山の絵を描いたといわれる横山大観は「富士を描くことはつまり己を描くことである。」¹⁾と言った。

俳句という絵とは違う表現方法の世界を極めた俳人高浜虚子も自ら提唱した「客観写生」において、花や鳥を描きながら作者自身を描くのだと述べている²⁾。

このように写生は、自然と向き合い対象を描くことを通して自分自身を見つめ、対象に愛情を注ぎ、更に自らを鍛えるという極めて精神性の高いものとしてある。

教育においては、大正初期、山本鼎がその精神性を高める写生を教育に持ち込み、子どもたちの成長にかかわらせようと自由画教育³⁾推進を唱えた。それを支持した赤津隆助も、単に物をかき写すのではなく、内面的なものに深くかわり、表現される写生を子どもたちの教育に生かしたいと願っていた。

赤津は子どもの描写の態度が、真剣で、真面目で一生懸命に其物になりきって描いたものを佳とし⁴⁾、自由画の主張に共鳴するのはこの点にあるとして、自然を対象とした写生の教育的意味をその取組姿勢に求めている。これらの姿勢を育むことが人格の形成に寄与するものだと考えたのである。

しかし、この自由画教育の意思は当時の現場の教師に十分伝わらず、子どもを放任して戸外に追いやるだけの残念な結果に終わったという。

赤津は当時、山本の自由画教育が誤解されてその実

を結ばなかったことを、具体的な教授法を明示しなかったことにあるとして、その不足を指摘していた⁵⁾。

3. 写生の実践に際して

(1) 写生への苦手意識

現代の学校教育現場において、景色や事物を見て描くいわゆる写生は多くの児童生徒の造形表現活動の好き嫌いを決定させるほど大きな位置を占めている。

2008年4月、関西国際大学1年生88名、2009年4月、同じく関西国際大学1年生89名に、また2010年4月は広島文化学園保育学科1年生77名の学生に「造形が好きか、嫌いか」を問うたところ、「どちらかと言うと嫌い」も含めて半数弱の学生が「嫌い」と答えた。

そして嫌いな領域は、そのほとんどが「絵」であり、「上手に描けない」がその理由の大半であった。見て描く絵において、適切な手立てのないまま再現的な描写力をいきなり求められて自信を失い、他の表現活動にまで苦手意識を引きずって青年期まで来ているのが実態である。

早くから大きな意義を提唱されていた写生が、現代

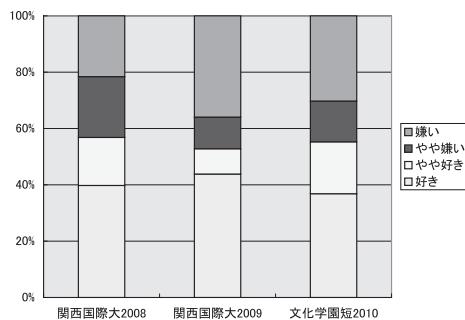
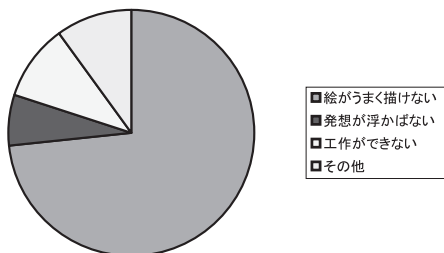


図1 大学入学時の造形好き嫌い

関西国際大学



広島文化学園短期大学

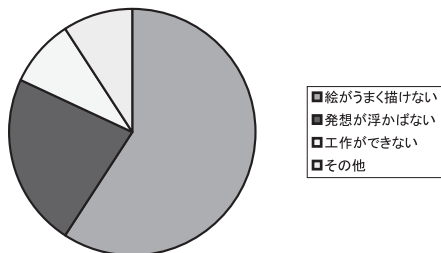


図2 造形が嫌いなわけ

に至るまで現場に根づいてこなかった理由は、「よく見て描こう」と繰り返し言われながら、どこをどのように見るか、どんな見方をしたらよく見るようになるのかを示されてこなかったということであろう。

その結果、写生といえば写真のように再現的に描かれた作品が求められるようになり、それが多くの図工嫌い・美術嫌いの児童・生徒をつくることになったと言える。

学生の造形が嫌いな理由は、「うまく絵が描けないから」「絵が下手だから」が回答のほとんどを占めている。次いで「自由に描いたりつくったりさせてもらえない」「焦られるから」等である。

また、「造形表現が嫌いになった時期」を問えば、「よく覚えていない」を除くと、ほとんどが小学校中学年以降、中学校に集中していて、見て描く絵が題材としてのウエイトを占める時期と一致する。

以上のことから、対象を見て描く写生において、現場の教師は、子どもたちにこうすればよく見ることにつながり、その姿勢が作品に反映されるということを理解させるため、描くための手立てを子どもたちにわかりやすく示すことが求められているのである。

(2) 描きながらそのものになりきる

ローウェンフェルドは子どもたちが対象と十分自己同一化できるような手立てを、教師は持たなければならないと主張した⁶⁾。

また赤津は内面的なものに深くかかわる写生に対する態度として、「真剣で、真面目で一生懸命にそのもの

になりきって描くこと」を求めた。

どちらも対象に働きかけて深くかかわり、一体化することが人格形成上大切であると言っている。

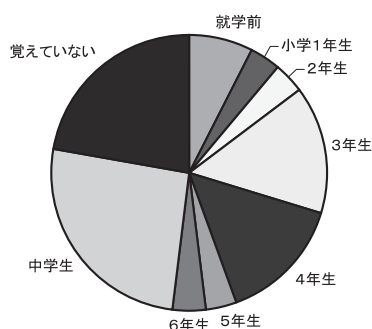
つまり、写生においては描いている対象そのものになりきって同化することが必要だということである。

(3) 対象と語りながら描く

それでは、ローウェンフェルドの言う同一化に導くための教師が持つべき手立てとは一体何なのだろうか。どうすれば対象と自己同一化し、そのものになりきることができるのか。また赤津が求めたように、真剣に、真面目に、一生懸命にそのものになりきって描くことができるのか。

それは人間同士が仲良くなり、ひいては相手の痛みを自分の痛みとするまでに一体化する過程と同様に、まず写生をする者が相手に語りかけることである。対象とコミュニケーションをとり、相手をよく知り、仲良くなることである。相手を知って身近に感じたら、更により近づこうとする。状況を理解し、もっと対象の思いを汲み取ろうと耳を澄ます。謙虚になって相手の声を聞いたり姿を見たりしたら自ずと生命の不思議さ、力強さ、忍耐力、適応力等計り知れないよさや偉大さを感じ、その美しさに賛嘆する。それは、やがて自然に対する畏敬の念やいとおしさ、対象を思いやるやさしい気持ち、愛情へと変化する。そして持てる力の全力を駆使して対象に喜んでもらえるように感じたままに描きたいと思う。いつしか対象と一体化しているのである。

関西国際大学



広島文化学園短期大学

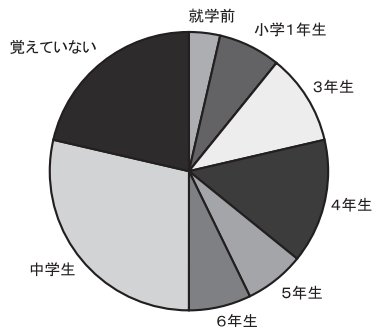


図3 造形が嫌いになった時期

絵を描きながら繰り返すこうした内面的な営みは、相手の思いに沿おうとして集中力を高め、よく見、見たことを表わそうとして描写力を磨く。更に自らの表現への取組方を問うこととなり、ひいては自分自身のあり方を見つめることになるのである。

懸命に描いた作品にはその気持ちが込められていて、見る人の心を打ち、自分も充実感を得る。そしてこのような体験は、やがて児童生徒・学生たちがあらゆる物事に向かう真摯な姿勢を育てることにつながる。

対象と語めることはまた、その思いにより近づこうとする営みであるから、表現しながら相手意識を育み、周りの人とよりよく交わろうとする適応力をつけ、やがて日々の生活に生かされることになる。

このように、対象と語りながら描く写生は人格の形成に大きく寄与することになるのである。これらが自信となって更にまた成長を促すことになる。

この対象と語りながら絵を描くことが同一化につながるのではないかとヒントを与えてくれたのは、筆者の広島市立亀山小学校担任時代、1987年5年生理科の学習における一人の児童の観察ノートであった。春の準備をしている冬の枝の硬い芽に向かって「早く大きくなってね。」と呼びかける記述があった。対象に対する彼女のやさしい思いに触れて心のあたたかさを感じた。

「対象に語りかける」ことは、「よく見る」ことにつながる具体的な方法である。「よく見よう」「真剣に描こう」「一生懸命になろう」といくら呼びかけても、それはいかにも観念的で、子どもたちはどうすることがよく見ることや真剣になることなのかを理解できないのである。

「よく見ること」「同一化すること」につながる具体的な方法として、「相手と語りながら描こう」という誘いは写生指導の具体的な手立てとなった。それは物をよく見る真摯な姿勢を作るための触媒の役を果たすことになった。語りかければまた、対象からの声が聞こえる。この繰り返しを対象に寄り添い、対象になりきる同一化へと続く営みとなるのである。

4. 方法 と 結 果

(1) 小学5・6年生(42名)の写生

学級裁量の「ゆとりの時間」に、季節の花や野菜などを教室に持ち込んで、その対象と語りながら写生をする取組を次のように重ねた。

題材：梅の花 れんげ たけのこ ネギ坊主 とう

もろこし 彼岸花 コスモス 菊の花 パイナップル 菜の花 アジサイ

時間：各題材約30分程度

用紙：いろいろな大きさを用意しておき、各自で選ぶ

画材：細ペン 水彩絵の具 色鉛筆など

写生の時間が始まると、物音一つしない静寂が教室を包み、いつしか子どもたちはこの中に身を置くことが心地いいと言うようになった。

絵を描くことが苦手だと言っていた児童も、こうした一生懸命に絵を描く友達の雰囲気誘発されて対象と向き合う中で、ぎこちない表現にもていねいさが表れ、緊張感のある見応えのある絵を描くようになった。そのよさを友達にほめられたり、描き上げたという達成感を味わったりしながら、絵が苦手だと言っていた者も少しずつ自信を持つようになった。

彼らは友達の作品や自分の制作態度、周りの評価等から、いい絵とは、心をこめてていねいに描かれた絵であることを知ることになったのである。

次は、卒業時に「写生時の対話について」振り返った児童たちの一文である。

- ・絵を描きながら「風に吹かれて寒いだろうな」と僕の気持ちを伝えると、花の気持ちがわかるような気がして、人の気持ちもわかるような気がしてきた。
- ・花と対話しながら絵を描いていると、いらいらしている時も心が落ち着く。
- ・相手に話しかければ、思っていることが絵にそのまま表れるということがわかった。
- ・話しかけながら描くと、集中できてうまく描けた。
- ・描くものと話して相手の気持ちを考え、そしてまた話をするようになった。
- ・対象物と話することで、自分の力をどれだけ伸ばせたか、相手は喜んでるか、そんなことを考えるようになった。ただ絵を描くだけでなく、絵は気持ちを表わすということを勉強した。

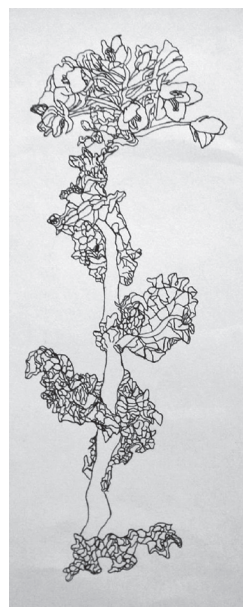
以上のように、2年間で11題材の写生をした児童は、一様に写生の時間を楽しみに待つようになった。絵を描くことが嫌いだと言っていた児童も、苦手意識がなくなり、表現することに自信を持って終えることができた。

(2) 大学1年生の写生

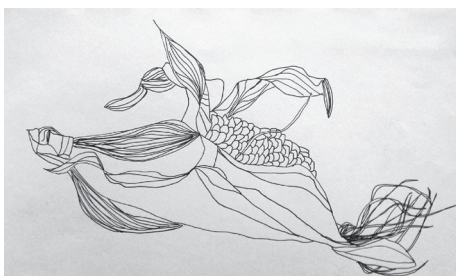
(幼稚園教員及び保育士を目指す教育学部保育専門



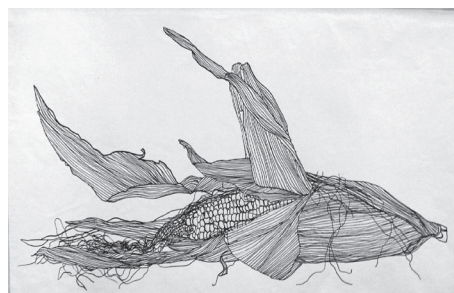
児童作品 1



児童作品 2



児童作品 3



児童作品 4



児童作品 5



絵が苦手だと言った児童の作品

コース一年生，3クラス89名)

写生「花と語る」の授業

本実践は，90分一コマの限られた時間の中での一題材として行った写生の授業であり，線描中心の取組である。

日 時 2009年5月14日(木) 2・4・5限(各90分)
題材名 「花と語る」
ねらい 花と語りながらよく見て絵にかく
準備物 五月梅(一人一輪) 用紙 細ペンなど

① 花との対話

「花と語りながら絵をかこう」と題材の提示をした時，「クスッ」と思わず出た笑いや「そんなことできる訳ない。」という何名かの学生の拒否反応があった。青年期の学生であればなお更のこと，皆が簡単に人間以外の物と同化しようとするのはむしろかしいだろうということは想定内の反応である。

ところが，事後のアンケートによると82.5%，66人の学生が絵を描きながら花に語りかけていた。

対話できたという者へ「対話したことが自分の気持ちにどのように作用したか」と問うと，学生の返事は表1の通り，「素直な気持ちになった」「気持ちが明るくなった」「あたたかい気持ちになった」「穏やかになった」「やさしい気持ちになった」「心が透き通る気がした」「落ち着いた」…等々の答えがあり，対話によって大変前向きな気持ちになったことが伺えた。

表1 対話が気持ちに作用したこと
人数(複数回答)

対話した時の気持ち	穏やかな気分になった	7
	やさしい気持ちになった	5
	落ち着いた	5
	いやされた	4
	和んだ	3
	あたたかい気持ちになった	3
	花に愛着がわいた	3
	美しい心になれた気がした	3
	無心になっていた	2
ち	すがすがしくなった	2
	「がんばろう」と前向きになった	2

対話した時の気持ち	楽しくなった	2
	素直になれた	2
	新鮮な気持ちになった	1
	幸せな気分になった	1
	明るくなった	1
	心が透き通るような気がした	1
思ったこと	リラックスした	1
	花を応援していた	1
	花も生きているから応援しないといけない	6
その他	人と同じように，物にも心を開いて語り合うことが大切	1
	花のように大きくなりたい	1
	自分を見つめることになった	1
の	花からの評価が厳しかった	1
	一つの「モノ」だけに思えなくなった	1

そして，表2が示すように，これらの対話による写生の学習によって，物を見ることや対話することの楽しさを知ったという者も多くいた。

(振り返り文より)

- 絵をかくのは苦手だけど，花と話しながら向き合って描いているとたくさんの線や表情が見えて楽しくなっていました。何かをしっかりと「見る」ということの面白さを感じました。
- 最初は，花と話すなんて何かへんだなと思っていましたが，細かいところまで見て描いていくうちに，自然に頭の中で会話していてとても楽しかったしいやされました。

更に，気持ちを通じ合わせた花を絵に描く時，その花が喜んでくれるようによりていねいに，美しく描きたいという気持ちになったとも言う。その表現意欲は自ずと集中力を高め，時間のたつのも分からないほどだったと振り返っている。

このことは正に赤津が「描写の態度が真剣で，真面目で一生懸命にそのものになりきって描いたものを佳とする」と言って求めていた取組方に近づいた態度だと言える。事実，ここでも一旦写生を始めたら，3クラス共静寂が教室中に漂い，なかなか花に話しかけられないでいた者もその雰囲気の中で花にのみ向き合ったという学生もいた。

表2 対話と写生時・写生後の思い

話しかけたこと	花の声	描くときの姿勢・気持ち	描き終えて
<ul style="list-style-type: none"> ・きれいだね ・かわいいね ・すてきだね ・どこを向いているの？ ・今、どんな気分？ ・その色、落ち着いているね。 ・すごい。細かくできているね。 ・一生懸命生きているんだね。 ・君の明るさを描くよ。 ・アピールしたいとはどこ？ ・どう描けばいいかわからないから教えて。 ・ただの花には見えないよ。 ・君が望むように描きたいんだ。どう描いてほしいの？ ・厳しいなあ。これでも一生懸命描いているんだよ。 ・せっかく咲いているのに切ってごめん。僕らの勉強の手助けだと思ってがまんしてくれ。 ・僕も君のがんばりに習っているいろんなことをがんばるよ。 ・僕の話に答えてくれてありがとう。君と話ができるなんて驚いたよ。初めてのことなんだ。 ・実は面白くないことがあってさっきまで気分悪かったんだ。でも君に癒されたよ。ありがとう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・きれいに描いてくださいな。 ・もっときれいにいかいて！ ・今、ちょっと寂しいの。 ・描いてもらえてうれしいよ。 ・私を見つめてくれているのね。 ・こんなに見つめられて不思議な気持ちになっていきます。 ・どんな時もきれいに咲こうと努力しています。 ・私の花びら、白いばかりではないでしょう。そこを描いてください。 ・私の後ろ姿はどうですか。 ・落ち着いて描いてね。 ・(描き終わった時) ありがとう。でも私の花びらの柔らかさをもう少し表わしてほしかったなあ。 ・私はもう少しで死んでいくことになっています。私のことを忘れないでいてくださいな。 ・この教室につれてこられて、大勢の学生さんに出会えて幸せだと思っています。 ・生き生きした葉っぱを描いて。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生命力や美しさを描こうとした。 ・ていねいに描こう。 ・花に抱いた愛着を絵で表したい。 ・花が顔を背けた訳を考えた。 ・花がどうなりたいかわかった。 ・細かいところまで表現しようとした。 ・姿だけでなく、花の感情までも表わしたいと思った。 ・花の表情が見えた。喜怒哀楽を感じた。 ・花が喜んでくれるように描きたい。どう描けば喜んでくれるだろうか。 ・花のように気持ちを落ち着かせて描こう。 ・花に負けずに一生懸命描こう。いや、描かせてもらおう。 ・普段目にしない花の一面を描きたい。 ・角度の違いで表情が違うことに気づいた。 ・何だろう。この明るい気分。 ・自信あふれる花の代わりにアピールしたかった。 ・花の言葉で何となく性格がわかった。 ・強い性格を表わそうと思った。 ・微妙な色の変化を表わしたい。 ・この和やかな雰囲気を表したいと思った。 ・友達になれたようだ。 ・花の気持ちを理解しようとした。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生命力や美しさを表わした。 ・ていねいに描いた。 ・活き活きと描いた。 ・かわいく描いた。 ・細かいところまで描いた。 ・花が好きになったし、花に好かれた。 ・恥ずかしそうにしている姿を描いた。 ・花の気持ちになって描けた。 ・いい線の絵が描けた。 ・花に喜んでもらえただろう。 ・絵の花に輝きが出たようだ。 ・雰囲気を描けた。 ・葉の裏や花びらの表情など細かいところも表せた。 ・隅々まで観察し、表現した。 ・命が吹き込まれたような作品になった。 ・明るく光る花が描けた。 ・葉っぱに力を入れて花の代理を務めることができた。 ・花が満足してくれたかどうか不安だ。 ・楽しく描くことができた。 ・私の性格のようなかき方ができた。

〈振り返り文より〉

- 人生初めて花としゃべったと思います。ゆっくり描くことはとても神経を使ったように思います

が、教室の中がとても静かだったので、私も集中して描くことができたと思います。

また、対話ができたと答えたすべての者が、対話

をよかったと評価し、「絵を描く上で邪魔になった」とか「煩わしく思った」等のマイナス点を述べた者がいなかったことは、対話が写生に有効的な手段であったと言えることができる。

そしてこの写生の学習が造形への自信となったという者もいた。



学生作品 1



学生作品 2

〈振り返り文より〉

● 僕は見て描くのが嫌いで、そのせいで造形の時間は苦手で好きではありませんでした。でも今回の先生の言葉どおり、対話しながら見えたものだけ見たものだけをゆっくり描いていくと、思ったより上手に描けました。少し、造形への苦手意識がなくなったかなあと感じました。

更に、「花に話しかけるなんて考えられないと思っていた」と言う学生や「花の声が聞こえた時震えが来た。」といったような衝撃を語った学生は、「花のがんばりに負けないように生きなければと思った」と、自らの生き方を重ねて、今回の写生が自分を見つめる機会となったことを教えてくれた。

〈振り返り文より〉

● 写生しながら花を見ていて、一心に、本当に生きているなあと感じました。自分ももっと必死に生きようと思いました。

そしてまた、この対話の経験は本題材の花との関係のみに終わらず、身の回りの生き物や人工物さえも「ただの物」としてではなく心あるものとして思えるようになったと言った者もいた。

② 対話できない

ところが、「語ることができなかった」と答えた学生が17.5%，14名いた。小学生でも対話できない者はたいていクラスに1人ないしは2人はいたが、本実践の学生においてはその約2.3倍といった状況である。

発達心理学において、幼児に近い程主客がなお未分化で想像的遊戯を好み、ごっこ遊びに象徴されるようにどんなものともたやすく同化されると言われる。そして青年期への成長と共に自我を自覚し、主体と客体の二元的思考が進むのが常である。したがって学生の中に、人間以外の物と会話するなど論外であるという者がいるのも当然であろう。それだけに、半信半疑やってみたら対話できたということに対して、学生たちは小学生以上の驚きと喜びを持ったのである。

しかし、大人でも野に出会うお地蔵さんに思わず手を合わせて話しかけたり祈ったりする例があるように、自分以外のものと同化し、安らいだり前向きになったりすることがある。

青年期の学生は、対象と語りながら描くという写生のこの手立てによって、対象と同化する新鮮さや心地よさを味わうことができたものと思われる。

そこで、「語ることができなかった」と答えた学生にその訳を尋ねたら、次のような理由が挙げられた。

- ・「絵を描くことに対する苦手意識が強く、花と話すゆとりがなかった。」(3人)
- ・うまく描きたい気持ちばかりが先行し、話すことを忘れていた。(2人)
- ・「どのように話したらいいかわからなかった。少し枯れかけている葉っぱを見るとますます話しづらかった。」(1人)
- ・ただのモノとしてしか見ることができず、最初から話などできるはずがないと思った。」(3人)
- ・「地から切り離され、水につけられた花はモノにしか見えなく、花の声が聞こえなかった。」(1人)
- ・「花を理解しよう、花と仲よくなろうという気持ちがもてなかった。」(1人)
- ・「花と真剣に向き合えなかった。」(1人)
- ・「なぜ花と話すのかわからなかった。」(1人)
- ・「花と話すのは超人レベルだ。」(1人)

以上のようなことがその理由であった。「苦手意識が先行して話せなかった。」「どのように話せばいいかわからなかった。」と答えた6名の学生は、話したいという思いはあったが結局は話せなかった。また対話できなかったことに心を残して、「次に挑戦したい。」と意欲を示す者もいた。残る8名は「話せる訳がない。」と、試みることをさえていなかったが、対話できた友達の声の聞いたり作品を見たりして「そんなふうに話しかければいいのか。」とつぶやいていた者もあった。彼らは次の機会にはまた違った取組方を見せられるだろう。

また、切花をモデルとしたことに不満を持ち、自然のあるべき姿を大事にしたいというこだわりを示した学生は、あるがままを大事に表現しようといっているが、花の自由を束縛しているのかという思いであった。

このことについて上村淳之は対象物だけの写生ではなく、むしろその外側にある空気を感じて、描く側の心を映し出すことが大事で、そのためには五感を通して感じることでできる方法を取るべきだと述べている⁷⁾。その点において、一様に切花にして教室で描くという学習環境設定の妥当性を吟味しなければならないし、「語りながら描く」という対象とのコミュニケーションだけでは及ばない更なる手立てが必要だと考える。

③対話が絵を描くことに作用したこと

一方、対話できた者は、造形表現活動の好き嫌いにかわらず全員が対話は表現活動にプラスに作用したと答えている。従って、作品に対する自己評価も高く、

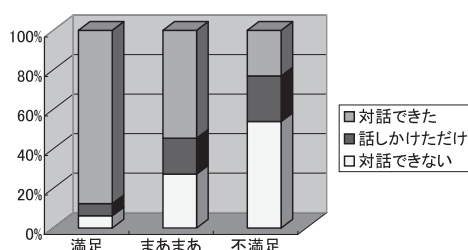


図4 対話と作品満足

86%の者が満足していた。「満足できない」と答えた3名も、再現的な絵を描くことの苦手意識は依然としてあるが、対話しながら描く活動は「楽しかった」と振り返っていた。このことは、対象に対する思いは十分あるのに、その気持ちに造形表現技術が伴わないということにジレンマを感じていると考えられる。対象への気持ちを込めて一生懸命に描いても、それだけでは満足できない表現技術習得の課題を認識しなければならない。

また、対話できなかった者の中では作品も満足できないと答えた者の割合が大きかった。

これらのことから、対話ができるかできないかは作品の満足度にも影響すると言える。

5. 考 察

どうすれば一つ一つの題材が児童生徒や学生の人格の形成にかかわることができるのだろうかという課題意識を持ちながら、対象と「語りながら描く」という写生の方法に期待して実践を重ねた。

その結果、「語りかける」ことによって、彼らは次のような反応を見せた。

まず、必然的に対象をよく見るようになった。よく見て対象のことを詳しく知ろうとした。思いを寄せて続けて話しかけてみた。心を通わせた対象に喜んでもらえるように表現しようと努力した。

このように、対象と語りながら描くという写生の実践は、相手に対する優しさや素直さを育むと言える。更に気持ちを落ち着かせたりがんばろうという意欲を誘発したりといった前向きな気持ちにさせる作用をした。

また、造形表現活動を苦手としている者、とりわけ写生のような再現的表現を「上手く描けないから嫌いだ」と言っていた児童や学生の多くが「語りながら描くことによって、描くことを楽しいと感じた。」「一生懸命描けばいい作品ができることがわかった。」「花と語って花の気持ちを裏切らないよう集中して描い

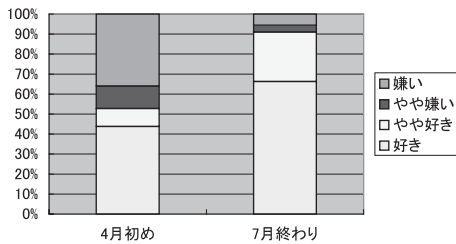


図5 造形好き嫌いの変化

た。」「今回の写生で、上手いという評価の基準が変わった。」といったような感想を残したことは大きな収穫である。特に、彼らのいい絵の基準が、再現的描写力が優れているだけの絵から一生懸命さが伝わる絵、会話が聞こえそうな絵に移行しつつあった。そのよさは、当初「下手だから」と作品揭示を渋っていた者が、その後の造形の授業が終わる毎に堂々と皆の前に作品を出したり、その作品を囲んで批評し合うことを楽しむ輪が自然に大きくなったという状況が語っているように思われる。

また、関西国際大学2009年度の4月初41名が「造形が嫌いだ」と言っていたが、7月末の調査では5名に大きく減少していた。

本題材は15コマ分の1コマの活動に過ぎないから、この写生のみの成果だとすることはできないが、ほとんどの学生が自分の作品に満足していたことを考えると、「語りながら描く」という取組が造形活動を楽しみと思えるようになったその一端を担う要因として作用したと評価できるのではないだろうか。

事実、その後の造形活動においても、工作に登場する物やデザインしている自分の図案にさえ語りかけながら制作に没頭したと言う学生があった。

以上述べたように、絵を描くために「よく見ること」、よく見るために「対話すること」を勧めた結果、その対話によって対象をより身近に感じ、ひいては対象と同化し、それらのことが懸命に写生に取り組む態度を導き、結果として満足のいく作品ができるという

当方法の有効性が実証された。そしてこの写生における一連の流れの中で児童生徒・学生たちの人間的な成長が少なからず促されたと言える。

6. 要 約

本論文は、人間形成に関わる造形表現活動のうち、写生をすること、そしてその有効的な方法を研究することを目指すものである。

その写生において、児童や学生が対象と語りながら描くという実践を試みた。

それは、対象の形をただ写し取ろうとするのではなく、彼らを対象そのものの本質に関わらせ、同一化させることである。

児童や学生は、写生をしながら対象と語ることによって、対象の思いを推し量る。そしてやさしい気持ちになり、自然の力強い生命力を学ぶといったように変容していくのである。

彼らのこうした気持ちの変化は、懸命に絵を描く態度となり、緊張感のある作品を生み出すこととなった。これらのことは、対象と語りながら行う写生が、児童・学生の人格を育み、そして造形活動を進展させることを示している。

註

- 1) 横山大観：私の富士観，朝日新聞，（昭和29年5月6日）
- 2) 高浜虚子：俳句への道，岩波書店，34-35(1997)
- 3) 山本鼎：自由画教育，アルス社，4-5（大正10年）
- 4) 赤津隆助：図画教育の方法，赤津隆助，赤津隆助先生記念出版会，229-232（昭和51年）
- 5) 赤津隆助：自由画教育に就いて，赤津隆助，赤津隆助先生記念出版会，203（昭和51年）
- 6) ローウェンフェルド：美術による人間形成，黎明書房，51-58（昭和38年）
- 7) 上村淳之：日本画の行方，美術年鑑社，30（1992）

Summary

This paper is aimed at sketching of plastic representation related to developing character and studying the effective method.

I tried examining that schoolchildren and students sketched an object while talking with it. This is not trying to picture an object, but to make the schoolchildren and the students relate to an essence of the object so as to be identical.

The schoolchildren and the students contemplate the mind of the object through talking with it while sketching. This method made them kind, and they could learn powerful vitality of the nature. Such a change of their mind influenced their behavior to draw a picture sincerely and gave the picture with tension.

These experiences show that sketching based on dialogue with an object is effective in developing character of schoolchildren and students, and advancing plastic activities.